

---

# 銀の剣士は旅をする

リード

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀の剣士は旅をする

### 【Nコード】

N7677R

### 【作者名】

リード

### 【あらすじ】

某擬人化漫画の普憫に似ている女の子が友人に連れて来られた会場で目眩を感じたら異世界に移動した。何故？どうして！？そんな疑問を抱えながら天才少女宅に居候し、傭兵として働く。一緒に暮らすうちに天才少女を妹の様に思い始め、そして天才少女も彼女を姉のように慕い始めた。

そして、彼女が異世界に来て四年後、運命の鐘が鳴り始める。

更新速度は比較的ゆっくりです。

## 主人公設定（前書き）

取り合えず、ちよくちよく追加されていると思います。

## 主人公設定

名前：ギルベルティーナ・ノア・バイルシュミット

綴り：Gilbertina・Noah・Beilschmidt

偽名：ギルベルト・バイルシュミット

年齢：16歳（原作四年前現在） 身長：169？（以下同）

性格：ギルベルティーナの時とギルベルトの時の性格が違う。二重人格と言っわけではないが「TPOに応じてペルソナ（外的側面）を替えている」と言った感じ。

基本的に意外と根は生真面目で面倒見がいい、ルールなどに厳格。

キレたら皆がドン引きするほどのDS。サディステイク星の女王様口調はギルベルティーナの方が大人しく、ギルベルトの時の方がやや悪い。

異世界にいきなり飛ばされた為に実はガタガタな精神状態。表に出さずのため込む一方だが、表面がフランクな為に気付かれな  
い。

演技力がある。

髪の色：色素がほとんどなく銀。いわゆるプラチナブロンド。白金色とも言っ。

瞳の色：透明度の高い淡い青。

容姿：先天的に色素が薄い為に真っ白い。硬質な感じに整っている。可愛いよりカッコいい、カッコいいより綺麗。そんな顔立ち。

すらつとしておりスマート。腰の位置が高く足が長い。  
そして、実は隠れ巨乳。

クラス：魔剣士

趣味：菓子作り、楽器演奏、歌を歌う事

特技：炊事洗濯等の家事仕事、即興演奏

好きな物：ヴルスト、クーヘン、わんこ

嫌いな物：イニシャルGのとある虫

メイン武器：バスタードソード（両手半剣）

サブ武器：足（TOSのリーガルのな感じ）

備考：アスピオ出身のリタの親戚ということになっているが実際は異世界の人間。

ギベルという名の老兵に鍛えられ、素人以上の腕前を持つ。

魔術は気持ち悪いくらいの精密さでピンポイント爆撃をおこせる。

テルカ・リュミレースに来てから色々仕込まれて色々やってるせいで気付かれにくいのだが元の世界にいた時よりも身体能力が格段に上がっている。本人は重力の問題じゃねえの？と考えている。

アルビノほど色素が抜けている訳ではないが、髪と肌の色素が殆ど無い（日の光や人口の明りに体が過剰反応を起こすほどではないが普通の人よりも色素が格段に少ない）ために日の光が苦手（正確には長時間日に当たり続けるのが）。

名前の <sup>ギルベルト</sup>Gilbert、これが女性系に変化して <sup>ギルベルティ</sup>Gilbertina <sub>ナ</sub>

古代ドイツ語人名の Gisilbert に由来する。

gisil = pledge（誓い・盟約）、bert = bright（明るい・輝く）もしくは famous（有名な）。

「輝ける誓い」とか「有名な盟約」とか訳せばこんな感じで素敵。

名字の <sup>バイルシュミット</sup>Beilschmidt

語意は Beil = 斧、Schmidt = 鍛冶屋。

武器鍛冶師とか武器職人みたいなそんな感じ

一話 目眩に襲われ異世界へ（前書き）

若干不憫な少女の話を書こうと思います。  
更新は不定期気味になるかもしれません。

誤字脱字などありましたら報告をお願いします。

## 一話 目眩に襲われ異世界へ

神様なんていたら不敬だと言われようともぶつ殺す。  
少なくとも一撃喰らわせてやる。

そう、心に刻み込んだ何カ月か前の出来事。

私、父の影響もあって神様の事信じてただけどこれって酷くない？  
でも、母の影響もあって多神教も全然OKだからなあ・・・。  
勤勉な信者ではないからかな。うん。

それにしても此処に落ちてよかった、と思う。

だって、此処安全だし。

リタに聞いた騎士団とか貴族街に落っこちてたら終わってた。

6

青春を謳歌できない運命、というか人生？  
そんなのごめんだ。

私はギルベルティーナ・ノア・バイルシュミット。  
ミドルネームのノアは感じで書くと乃愛だから、そこんところ宜し  
く。

独日ハーフの元某府某市の私立女子高生。

現在は、アスピオのリタ・モルディオ宅に居候中。

普通可笑しいよね、異世界にワープなんて。

ありえないよね！！

それなのに私は某府某区某市で行われたコミケ&コスプレ会場で目

眩をおこしたと思ったら、メルヘンかつファンタステイクな世界に落っこちた。

今までいた世界から、ファンタジーだけど現実な世界に。

私は先天的に色素薄くて銀髪青眼。確かに珍しい色合いだけどそれだけだよ。

ドイツ人と日本人のハーフだけど、日本在住の普通の高校一年生だぞ！？

影で暗躍したり、チームを率いてたりしていないからね！？

空手は習ってたけど（国際的に武術としての地位が高いんです）、それ以外は音楽が上手いくらいだよ。

主人公気質なタイプじゃないからな！！

どちらかというと主人公の友人Eぐらいのポジションだから！！

それなのに、何故こんな目に……。

僅かに潤んでくるこの目は気のせいだ。

現実逃避したのは何カ月か前の話。

落っこちた先のアスピオのリタの家に、何とか置いてもらえることになって文字の勉強とか魔術の勉強（この世界には魔法があった！ありえない！！）しつつ、家事をしていたのに、私が来たせいで生活に少し困っているリタの姿を見て、一念発起。

年下の女の子にお金たかるとかヒモよりたちが悪い！！

なぜか、この世界に来て身体能力が格段に上昇してたので（仮説と

して重力の負荷があげられる)、元傭兵だったギペル爺に三日三晩かけてほぼ泣き落としに近い形でしぶしぶ許しを貰い、弟子入りしました。

そしたら、鬼か何かのように傭兵として戦い方を仕込まれました。

ギペル師匠、超怖い。

容赦ない。鬼上官にしか見えない。

背後<sup>バック</sup>に鬼が見える。

師匠の剣で何度か死にかけました。

右側、眼帯なのに死角なしくて可笑しいよね！？誰かそうだと言ってくれ！！

そのおかげで、まあ結界の外に出てもそう簡単には死なないだろうっというお墨付きをもらうくらいには成長し、それをリタに報告するとなんだか複雑そうな目で見られました。

そんな目で見られても働かないとご飯が食べれない。

暮らしていけないのは事実なので、しぶしぶ承諾してくれました。

ただし、条件をつけられました。

それは、傭兵とかそういう仕事するなら男のふりをする事所謂男装をして、だそうで……。

なんで？って聞いたら、女の一人で傭兵なんて危ないでしょうが！と叱られた。

年齢は私の方が上なのにリタの方がしつかりしてる。

ギペル師匠にもそうしろと言われたので、結局男装です。

最初に落ちて来た時に来てた某国擬人化の一人楽しすぎるぜ！！な国の公国時の服装。

所謂、僧衣っぽいシルエットが分かりにくいひらつとした感じの服

装です。

身長高いし、声も低めなので、胸を潰して身体のラインをどうにかしてたら、あら不思議。

鏡に映っていたのは銀の髪に鋭い目をした青年でした。

まんま、あいつじゃないか、とへこんだ私がいたのは内緒です。

男装名はギルベルト・バイルシュミットと名づけられました。  
リタに……。

私の名前、ギルベルティーナの男性名だからという理由だからだそうですけど、それはそれでへこみます。知らないはずなのに何で！と驚愕したのは此処だけの話です。

私は、普憫じゃないからなああああああ！！

「！！」

目が覚める。

どうやら夢を見ていたらしい。

壁にもたれかかっていた身体を伸ばす。

バキベキゴキと身体にありえない音がでた。

軽いストレッチをしてから剣を腰に帯びる。

外套を肩に引っ掛け、立ち上がる。

と、ドアの陰から

「ギルベルト」

紅茶色の目をしたカウフマンに声をかけられる。

「今日で契約は終わりだ。報酬を」

「・・・やっぱり、私のギルドに入る気はない？」

「悪いな・・・今の所ギルドに興味がねえんだ」

そう、口角をあげて告げる。

「そう、残念だわ。名が上がり始めてる僧衣の騎士を雇えないんで」

「“僧衣の騎士”？」

「あら、貴方が知らないなんて、ね。貴方の異名よ、ギルベルト・バイルシュミット。ふらりと現れ助けてくれる銀髪の剣士・・・結構な都市で流れてるわよ」

「馬鹿か、俺はそんなんじゃないよ」

ケセセと苦笑いしながら告げる。

「貴方はそう思ってるけど、そうじゃない人達もいるってことよ」

カウフマンの脇を通り抜ける。

カウフマンも苦い顔だ。

「知らねえよ。俺は俺の思つがままに生きるだけだ」

「まあ、これは忠告。貴方が極悪人を捕まえ歩いてるせいで騎士団の貴族が動いてるらしいわ」

「何でまた？」

「面子をつぶされたから、だそうよ」

めんどくさいな。

ひらっと手をあげる。

「」忠告ありがとうよ」

開け放った扉からは陽光と風が吹き込んでくる。それに目を細めながら、外への道を踏み出した。

異世界からやってきた少女ギルベルティーナ・ノア・バイルシュミット、もとい、傭兵ギルベルト・バイルシュミットの非日常はこうやって送られていくのである。

一話 目眩に襲われ異世界へ(後書き)

名前にシッコミはよしてください。

うたれ弱いので。。。。

あと、気軽に感想やコメントしてくれると嬉しいです！

## 二話 少女から見た彼女（前書き）

リタの口調がちょっと違うかもしれません。

変だったらお手数かもしれませんがちょっと教えてくださいませんかお願いします。

## 二話 少女から見た彼女

目の前にいるのは銀の髪をした端正な顔立ちの青年。

に見える整った顔立ちの女。

自分で言っておきながらあれだけど、ここまで化けるとは思わなかった。

胸を隠すためにさらしをきつく巻いて、体型をごまかすために布で巻いたり、服装だって大き目の男ものを着ていると鋭い目つき端正な顔立ちの美青年にしか見えない。

加えて、性格はがらっと、声色は少し低めに仕上げるのだから恐れ入る。

滅多にいない銀の髪に恐ろしく整った顔、結構真面目な性格、あのギペルじいさんについていける剣の腕も相まってアスピオの若い子にファンクラブができたと話したら、引き攣った顔をしてた。

あー、あんた、そういうの苦手そうなものね。と言ったら。

だったら止めるように説得してくれと頼まれた。

いや、だって怖いわよ。あの空間と言ったら。

肩を落として、もう、いいや。何食いたい？と尋ねられた。

もう、気にしないことを決めたらしい。というよりも、今は気にし  
たくないの間違いかしら？

そうして、台所に歩いて行ったギルの後姿を見ながら、過去に思い  
を馳せた。

昔の事を考えるとこうしてギルが台所で料理したり、暮らしている  
のは信じられないことだと思ふ。第一印象は何て言うか凄かったの  
一言でしか表わせないから……。

そもそも最初にあつたのは神様のいたずらとしか言えない。むしろ、  
双方にとって絶対にありえないことの類だっただろう。なんせ、異  
世界の人間、神様を信じていないあたし、向こうも知らない場所に  
一瞬で移動したことに呆けてた。

大体、あたしが異世界とか違う文化圏から来たという、そんな荒唐  
無稽な話を信じたのは、ギルが持ってた鞆に入っていた“けーたい  
”やら“ウオークマン”とやらを見せられたからだ。

テルカ・リュミレースではまだ有り得ない資源と技術を使ってでき  
た携帯できる機械。それはオーバーテクノロジーに値する代物で、  
今の技術、科学では作れないものだった。

ギルベルティーナ・ノア・バイルシュミットと名乗ったそいつ。ド  
イツのバイエルンと呼ばれる地方で生まれ、13歳から二ホンと言  
う島国で育ったという16歳の学生。行くあてがないと言ったその  
横顔を見て、聞いてしまったあたしはそいつを家に引き取った。

断じてほだされたとかじゃない。ただ、持つてる機材に興味があっ

だからそれだけ。  
だった、・・・最初は。

一緒に暮らし始めて、温かくておいしい料理を作ってくれて、部屋は凄く綺麗に整頓されていて、こういうのが家族っていうのかなあと思ったり。そんなこと思いながら、お返しに文字を教えてあげたり、魔術の理を話してあげると子供のように喜んだ。魔法なんて私の世界にはない、と目を輝かせて私を質問攻めにしてきたのも覚えている。

そうして何週間か暮らしているうちに、あたしが家計で悩んでいたのを知って、ギルが武器を取る道を選んだのも知っている。細くて白かった綺麗な手も武器を持つようになって、豆を何度もつぶし、前よりも無骨になったのも知っている。辛い時なのにいつも笑って笑顔で隠して本心をなかなか見せない。

年下の子にずっと頼りっぱなしってのは、ね。と笑ってたけど、それだけであんなに頑張れるものなのか。表向きは帰る方法を探すためらしい。ありえない、稼いだお金はほとんど家に入れてる癖に。

馬鹿じゃない？

そう、思ってたのに、気づいたら心の中に入り込んでいて、笑顔をくれた、頭をなでてくれた、欲しかった言葉をくれた。

元傭兵のギペルじいさんプラスチックに魔導器を貰って、魔術を行使して、危険な傭兵の世界に突っ込んでいった。

・・・今ならあたしとあなた。二人分くらいなら賄えるのに。

そこまで、思った所で声をかけられる。

「……リタ。お皿出して、ご飯で来たから」

「ん、分かった」

それでも、世界は回ってて、あたしとギルの時計の秒針が進むのである。

「……いただきます」

「おう、温かい内に食べなさいよ。いただきます」

二話 少女から見た彼女（後書き）

リタって、ほぼ一人で生活してきたわけだから根本的には家族愛的なものに飢えてそう。誰かがずっと一緒にいてくれた訳じゃないから一緒にいたらどうしたらいいか分からないとかもありそう・・・。

ギルとリタ。完璧にはないけど多少は打ち解けてきた頃の話。

ぎこちなく、見てる方がはらはらしながら見守るような義家族関係

あと、リタがギルの前で本を読みながら物を食べないのは、ギルが怒って凄いことになったからです。

三話 師匠と弟子なのに傍から見りゃ爺孫（前書き）

師匠と弟子の話。

なのに、完璧に爺と孫の話になってる。

オリジナル路線を突っ走る話になりそうです。

### 三話 師匠と弟子なのに傍から見りゃ爺孫

最初は、気まぐれだった。

理由は昔の自分に似ていたから。

それだけの理由と自分の気まぐれでこいつに剣を教え込んだ。

それにしても、見れば見るほどあの人にそっくりだ。

少し癖のある銀色の髪も意思の強そうな鋭い目元も、唯一違つのは目の色だけ。

この餓鬼は透き通るような薄い青色だが、あの人はこの世のものは思えないぐらい綺麗な紅色だった。

はっとするほど白い肌と硬質な顔立ち。整っているが故に恐ろしく冷たく見える容姿もそっくり。

でも、性別が違う。

あの方は男でこいつは女。

武器を持ったことのない人間<sup>ひと</sup>。

あの方は俺に剣を教えてくれた人間<sup>ひと</sup>。

それに、あの事件の後から俺はもう、剣を持つことはない<sup>と</sup>誓っていた。

でも、懸命に俺に頭を下げてくるこいつの姿が昔、あの人に教えを請うた若き日の自分の姿に重なった。

ただ、それだけだった。

それなのに、こつも入れ込み自分の技を心を剣を教え込んでもいいと思える人間に出会えるとは。

長い人生を生きている自分だからこそ、この出会いは運命だったと言いきれる。

時々出会うこんな愉快な餓鬼達がいるからこそ人生は素晴らしく愉快だ！！

ガイイン！！

剣と剣が合わさり刀身を削り、火花が散る。

何度か交錯しただけなのに腕がしびれることに舌打ちをする。

(馬鹿力が、あの細腕にどんな力が加わってるってんだ！！畜生が！！)

クルリと切っ先を回し迫ってくる剣を避け、拳を鳩尾に叩き込む。

ヒュツと息を飲む音が、やけにはつきりと聞こえた。

「つあああああ！！」

固まった身体を間髪いれずに地面に叩きつけ、起き上がるうとする餓鬼の首筋に剣を添える。

「まだまだだなギルベルティーナ」

「……ギベル師匠<sup>せんせい</sup>」

息を乱しながら地面にぶつ倒れてる弟子に手を貸す。  
上体を起こしながらぼやく弟子の声を聞いた。

「容赦ないですよね・・・」

「手加減してもらいたいのか？」

そうからかうように笑うと、眉間に皺を刻みながら、ぼつりと落とすように

「それは、嫌です」

不機嫌ここに極まりみたいな顔をしてぼやいた。  
それに吹き出しそうになりながら言葉を紡ぐ。

「だろっな」

そして不機嫌そうにぼやく弟子の髪をなでる。  
クシャリとした音のなるその銀の髪は見かけよりも柔らかく艶やかだ。

ぺしりとよわよわしい力ではたき落とされる。

「あー、もう！ー！こんなにぐしゃぐしゃにしないで下さいよ！ー！」

すいっと手櫛で直しながら、零す弟子。

わざとぶつきらぼつに告げるその言葉が照れ隠しだと気付けたのは  
若かったころの自分にも通ずるものがあつたからだろうか。

くくつと喉の奥で笑いながら、もう一つしかない目を細める。

それを見た弟子が顔を歪めたのが見えた。

「・・・その、笑い方止めてくれません」

心底不愉快です。と苦々しく零す弟子。

ますます、昔の自分に重なってにやりと笑う。

「いやーだ」

にやにや笑いながら告げる俺にイラツとしたのか、顔をうつすら赤くして、言葉を荒げる。

「ああ、もう！！貴方は餓鬼ですか！？少なくとも私よりも年上の癖に！！」

大人びてる綺麗な容姿の女が珍しく年相応の対応をするとこんなに可愛らしく見えるのかとなんとなしにほわりとする。

キー、キー困ったように喚く声も小動物、特に子猫のように聞こえるから不思議なものだ。

「あー、もう可愛いな畜生！！」

ガシツと頭を抱え込む（ヘッドロックか？）ように、頭を固定するとガシガシと頭を撫でる。

「じやー!?!」

ぎよっとしたように逃げようとする。弟子を抱え込みさらに撫でる。  
あーもう、何だろっこの心地。

多分、俺に孫がいたらこんな感じなんだろうなと思いつつ。  
思いつきり可愛がる。

ぜーぜーと息を乱すこいつを見て、孫がいたらこんな感じなんだろうな  
あと思った今日この頃。

### 三話 師匠と弟子なのに傍から見りゃ爺孫（後書き）

もうちょいしたら、旅に出させてとあるキャラに逢わせたいです。リタしか原作キャラが出ていないという恐怖……！

ついでに、恐ろしい修行。超スパルタなのに弱音を吐かないのは、主人公の意地と矜持が高いことと、恐ろしいとか辛いと思う感情、感覚が鈍く麻痺しているからです。

あと師匠ことギペル様の紹介。

ギペル・クロイツヴェーグ

隻眼の元傭兵。昔はドンやアイフリードと鎬をけずりあったこともある人物。

老人だから白髪。目の色は灰銀。老いても整っているキツメの顔立ち。

超強い。というよりも鬼。訓練、もとい修行はもっと容赦なくて鬼。

とりあえず、こんな感じで……。

これからも応援よろしくお願いします！！

#### 四話 あるへこんだ日の話（前書き）

凄く久しぶりに投稿しました。

これからも頑張ります。

血の表現が出てきます。

## 四話 あるへこんだ日の話

SIDE：ギルベルティーナ

日常の境界線を越えてしまった少女は帰り道がわからない。

いや、もうそれが分かったところで帰らないだろう。

だって、私は見つけてしまった。

自分を姉として慕ってくれる稚い少女を、自身をなんだかんだで見  
てくれる師匠を、異世界の人間を自分の身内だと認識してしまった。  
あの人達の所へ帰りたいたいと思うようになった。

そこまで、考えた所で向かってきたモンスターを叩き斬る。

ザシユと肉を斬る嫌な音と、それから一拍遅れて斬ったモンスター  
からはまだ生暖かい血が噴出す。

てん、てんと剣から垂れる滴をぼんやりと見つめた。

この感触が嫌いかと問われれば嫌いだと答えよう。

しかし、この感触に慣れたか？と問われればとうの昔に、としか答  
えられないだろう。

鋭く剣が肉を斬ることに、剣と剣を合わせることで起こる剣戟の  
音も、倒したモンスターや動物の毛皮や牙を剥ぎ取り売ることも、  
肉を解体し、肉を捌き料理することにも、慣れてしまった。

これでは、主人公の友人Eのポジションとはとてもじゃないけれど  
言えない。

非日常が日常になってしまった。

フツと歪んだ唇から洩れるのは歪んだ笑い。

自分がいた世界の常識との差異に、目眩がした。

しかし、私はそれでも、選んだのだ。

この世界と元の世界を天秤にかけて、選んだ。

親不孝者と罵られてもしようがない事をした。

そんな子供は帰れるわけがない。

「・・・しかし、人間離れしていくな」

そのうち、この感触を気持ち悪いと思わずに慣れてしまう時がくる  
んだろうか？

それは、・・・凄いやだ。

過去の自分が自分では亡くなるようで凄いやだ。

ひとつ溜息を落して、髪をかきあげる。

これで、今回の魔物討伐の仕事は終わりだ。

一呼吸して、自分の中のスイッチを入れ替える。

そして剣の血を払いカチツと鞘に納めた。

此処の世界に来て、伸ばして長くなった髪が風に揺れる。

見上げた空は、故郷の空の色にそっくりで泣きそうになる位綺麗だ  
った。

「さあて、帰ろう」

報酬は、結構多かった。

アスピオのリタには本を、師匠にはお酒でも帝都で買って帰ろう。

この世界で、自分の帰る場所があるのだから、待っていてくれる人がいるのだから。

異世界に落ちた自分にも守るべきものがあるのだから。

S I D E : デューク

焚火の炎に照らされて、うつすらと橙色に染まるまだ幼い少女。

初めて会った時は、正直少年かと思った。

異郷の空気を纏った不思議な雰囲気を感じていた、あやふやな容貌を持った少女。

冷たい印象を与える切れ長のアイズブルーの瞳。

綺麗だが見る者を斬りつけるかのような真つ直ぐな眼差し。

私と同じ銀の髪は白金の硬質な輝きを放っている。肌も雪の様に白い。

色素の薄く硬質に整った顔は雪像の様で酷く冷たく見える。

細いが鍛えられている事が分かる体躯に、体型を隠す様な服装。

首元も隠していた。

中性的な顔をしているからしょうがないと笑っていたが申し訳なく思った。

それが初めて会った時の話だ。

引き合わせたのはクロイツヴェーグ。

ギルベルティーナはクロイツヴェーグの孫で、あいつの剣を受け継

いだ剣士。

私にあつた時に驚いた顔をしたから初耳だったのだろう。  
あの男も無茶をする。

クロイツヴェーグは随分昔の友人だ。

エルシフルを通じて友人になった。それが最初。気難しいところもある偏屈な友人だ。

それにしても、引き合わされた時に、孫と言つた子供の弟子にあわされたのには驚いた。

剣を捨てたと話していたのに剣を持っていたのにも驚いたが……  
あの生きた瞳は人魔戦争の前しか見た時が無い。

まあ、あの気難しい友人が弟子にするのも無理はないと思う。

この沈黙を保つてられる気質は好ましい。  
一を聞いて十を知り、空気や心境を読み取る人間だ。

あの友人と相性もいいのも頷ける。

焚火の炎が音を立てた。

それを伏し目がちに見つめる少女は、やはりどこか異郷の雰囲気  
を携えていた。

S I D E : ギルベルティーナ

ホーホーとどこかで梟が啼いている。

夜の帳は既に落ちて、痛いほどに静かな空気が場を支配している。

こんな夜は、嫌いではない。

特に色々考えこんでしまった日なんかは、静かに過ごしたい夜だつてある……。

例え、師匠の友人。私の知人がいても構わない。

デュークさんはこういう時に察してくれる人だし、元々静かな人だ。感情に聡い稀有な性質を持つ人。

へこんでいて静かな夜が欲しい、その癖、人がいてくれたらなんて思う私は欲張りだ。

こういう時に黙っていてくれるこの人を好ましく思う。

パチンつと薪たきぎが音を立てて爆ぜる。

橙色の光を帯びて焰は燃える。

それに照らされるデュークさんの横顔は綺麗だった。

師匠の話だところ十年彼は歳を取っていないらしい。なにそれ面白い。

こう、人ではない美しさという表現があう男の人だ。

頃合いを見計らって焚火にかけていた鍋を匙でぐるりとかき混ぜる、すると湯気と一緒に美味しそうな匂いがほわりと立ち上った。

今作っているのは、シチュー。農村の報酬で貰ったお金と、材料で作ったモノ。

旅をしているからなかなか持ち運べない牛乳と生クリームをベースにホワイトソースを作り、鍋に放り込んだ。中に多めのじゃがいもに玉ねぎ、人参、キャベツにマッシュルーム、鶏肉を入れた。

とろみもちょうどいいシチューの状態を見て、器にシチューをそそぐ。

匙と一緒に器を手渡してから、宿の女将さんに焼いてもらった丸パ

ンを二つ取り出した。

デュークさんに一つ、私に一つ。  
浸して食べるようだ。

いただきます。そう呟いてから、

シチューを一掬いして食べる。  
うん、上出来。

デュークさんは何も言わないけど、文句も言わないのでそれはそれでよし。

不味くは無いし、取り合えず口には合うようだ。  
いつかはこの人に美味しいと言わせてみせる。

・・・この人、綺麗に食べてくれるんだけど、いや、それは作り手として嬉しいんだけど、感想なんてほぼしないからな・・・  
なんか、作り手としての敗北感が・・・

まあ、それは今は置いといていい。

へこんで人寂しい癖に、静かじゃないと駄目。

そんな我が儘な私の調子が狂っている事に気付いているのに何も聞かずに、傍にいてくれる。

分かりにくい優しさをくれる。

こんな人が傍にいてくれるならば、こんな夜も悪くない。

#### 四話 あるへこんだ日の話（後書き）

デュークさん視点むずい・・・!!

まあ、多分、時間軸的には矛盾していないはず。

これからもがんばります。

## 五話 下町の少年（前書き）

TOVの世界では英語は富裕層の教養として存在するっという設定  
（この小説の中で）があります。  
ご了承くださいー！

## 五話 下町の少年

SIDE：ギルベルティーナ

何日か一緒に過ごしたデュークさんと帝都の側で分かれた後、

私は帝都の門をくぐり、空を見上げた。

故郷の空と同じ色をした青い空。

透き通るようなスカイブルーに染め上げられている、空。

帝都のザーフアイスの町並みはドイツの旧市街や故郷のバイエルンを思い出させる。

ビル並みの大きさの城だって、山の上にあるドイツの古城にそっくりだ。

しかし、此処はいくらドイツに似ててもヨーロッパでもなく、それどころか地球ですら無いのだ。

ありえないことに。

決定的に違うのは空を覆う四重の光。

皇帝の城から伸びる剣の頂上付近に冠の様に君臨する光の文様。

シルトプラスティア  
結界魔導器と呼ばれる物。

異世界から来た人間に言わせれば摩訶不思議な代物だ。

何も知らないでそんな便利なものを使ってるって怖くないか…？

簡潔に理論をまとめて説明した後、安全性について討論させるって感じ。

……それにしても、

「でっけー……」

思わず感嘆した。

素直に凄いと思う。

こんなのドイツでも日本でも見たこと無い。

男口調なのはご愛嬌。

今の私、いや俺は“僧衣そつゐの騎士きし”の異名をとる傭兵。

ギルベルト・バイルシュミット。なのだから。

黒革の手袋で覆った手で顔をひと撫でする。スイッチを切り替える為に、触れる。

そこにいるのはギルベルティーナ・ノア・バイルシュミットではなくギルベルト・バイルシュミットだ。

黒い僧衣に、剣を携えた傭兵。

大胆不敵で唯我独尊な、それでいて実は面倒見のいい人間の性格の仮面を被る。

スイッチを完璧に切り替える。

耳に甲高い声を感じ取り、ひょいっと路地裏に飛び込む。

微かな声を頼りに坂を下ったり、道を変えたりしながら、進む。

街のすみの辺りに移動すると、声の主だろう小さな少年と年老いた男性。

それを取り囲む三人の騎士団員。

思いつきり、騎士が悪もんだな。これは。

この世界に来てからどうやら感覚が鈍っているらしい。

昔なら時代錯誤にしか思わないものを本物だとしつかり認識した。

呆れたように、騎士を眺めた。

やたらと偉そうな騎士が一人いる。

きつと一番、地位が高いか血筋が上なんだろう。

子供に何事か言い返されて頭に血がのぼったのか、剣を抜いた。

流石に取り巻きの騎士も不味いと思ったのか止めようとする。

しかし、間に合いそうにない。

とっさに子供と騎士の間に入り、剣を抜いて受け止める。

鋼と鋼が合わさって、耳障りな音を立てた。

目を見開く老人と子供。

顔を歪める騎士。

それを視界に納めて、ケセセと笑った。

手首を返して、剣をはじき返す。

肩につかないぎりぎりにまで伸ばした髪と、黒の僧衣がふわりと舞った。

SIDE：テッド

今、俺の目の前では真っ白な人がご飯を食べている。

椅子の脇に剣を立てかけて、綺麗な手付きで、デーンと大きく盛られた料理に少し困ったような顔をして、それでも文句を言わずに綺麗に残さずにきちんと食べている。

俺とハンクス爺を助けてくれた銀の髪をした人は、ギルベルト・バイルシュミットという。

騎士の様な人だが騎士ではなく傭兵で。

ザーフアイスには妹への贈り物を買いに来たそうだ。

………なんというか、ねえ。

意外とこの人、繊細っぽい。

大雑把そうに見えて、細かい所とか気にしてそうだ。

「ん、どうしたテッド。俺の顔になんかついてるか？」

「ううん、なんでもないよ!!」

「そうか…。それにしても、このポトフ美味しいな」

黙々と食べていたギルベルトさんだけど箒星の女将さんが作った料理は美味しいと思ってたみたいだ。うっすらと顔を綻ばせるギルさんに、女将さんやハンクスさん、それに僕以外の食堂の人が溜息をついた。

ギルさんはあまり自覚してないみたいだけど凄く綺麗だ。

・・・男の人に綺麗っていうのもなんかおかしいような気がするけど綺麗なのだ。

艶やかで手触りもいい、素晴らしい白銀の髪。ブラチナブロン下

それに近い淡い金色の髪なら子供に見かけなくもないけど、大人になっても淡い髪の色、しかも金で無く銀色なのは珍しい。だいたい

は大人になるにつれて色が濃くなっていくから。  
それにギルベルトさんは髪だけではなく、肌や瞳の色も白くて淡い。  
肌は肌理細かく、ほんのりと光を零すような艶がある。  
整った顔立ちとも相まって、どこか人形めいても見える。

立つてるだけでお金が取れそう、とひっそり思った。

「ねえ、ギルベルトさん」

「なんだよ、テッド？」

「なんでギルベルトさんは傭兵になったの？」

ギルベルトさんは少し考え事をするかの様に間を置いた後、悪戯っぽくキラリと瞳を光らせてから、口を開いた。

「: A secret makes a man man . (秘密だ。なぜなら、その方がカッコイイから)」

「え？」

この人、わざと分かんないようにいつてる!!  
英語なんて、相当教育を積んでなきゃわかんないよ！

僕がムスツと膨れると、ギルベルトさんはくくくと喉の奥で笑った。  
僕らを見てた皆も穏やかな会話を繰り返している。

だけど、そんな穏やかな空気は乱暴に入ってきた騎士たちに壊された。  
た。

乱暴に蹴り破られたドアは、蝶番が外れかけている。

貴族であろう騎士たちはギルベルトさんに剣を向けた。

S I D E：騎士D

「ギルベルト・バイルシュミットだな」

「ああ」

上官が銀の髪をした瘦身の剣士にその言葉を投げかけている。  
銀の剣士はうっとうしそうに俺達を見据えてきた。

「公務執行妨害の容疑でお前を連行する!!!」

そう、偉そうに上官が言うと

「 ついでに従わなかった場合は？」

こともなげに言っただけだ。

アイスブルーの瞳はだんだんとその冷たさを増していつている。  
そんな危険な事に気付かないまま上官は言葉をつづけた。

「お前が庇ったとかいう、子供と老人が牢に入れられるだけだ」

空気が凍りついた。冷えるとかいう表現ですらない。

もう、アイスブルーの瞳には熱の片鱗さえ見せない冷たさだけが支配している。

喉がごくりとなった。

宿に居る下町の住人や隣の同僚でさえも気付いているのに上官だけが気付いていない。

「……！！」

何事が声を発した後、その剣士は側に居た子供に向き直った。

「テッド……」

「何、ギルベルトさん？」

「俺の荷物と剣を預かっていてくれ、…あんたらに迷惑をかけるわけにはいかないから」

後者の言葉を宿の女将と代表者であろう老人に投げかける。そして、上官と俺達に向き直った。

「行くんなら、早くしてくんないか？」

それはありったけの嫌みを籠めた言葉だった。

## 五話 下町の少年（後書き）

次回は、騎士の誰かに会わせたいです。  
これからも頑張ります。

## 六話 牢の中で見た夢（前書き）

牢屋に放り込まれて、いつの間にか見た夢。

・ ・ ・ 主人公は現代人で高校生だったので、引きずってることも色々あるんですよ。

## 六話 牢の中で見た夢

いつの間にか黒い空間に立っていた。

その時点で違和感なく、「ああ、これは夢だ……」と理解する。

自身がこれに気付いた時点でくるくると姿かたちの変わる空間。

眼前に過去の記憶のかげらのようなものが浮かんで消え。浮かんで消える。

まるで、あれだ。

走馬灯じゃねえか。

思わず脳内（夢の中で脳内もあつたものじゃないとは思っけど）で突っ込んだ。

家族や、友達や、学校の先生やクラスメートの顔がふよりと消えては現れる。

少し前なら、当たり前だった光景。

当たり前のように享受できていた日常。

もう、諦めていた。

そのはずなのに、ぽたぽたと頬に涙が落ちてきた。

帰れない、大切な所。

帰れる方法もあるはずだと考えていた考えは来てすぐに打ち砕かれた。

この世界には、魔法がある。

しかし、物質移動系の魔法は、太源がそもそも存在しない。

魔法という学問としての根っこの部分が存在しないのだから。

葉っぱや花、実の部分である理論や理屈や設計図、魔導書のようなものはない。

そもそも、自分がこの分野において研究をし、理論や定理を発見したとしても。

おそらくその理論は物質移動についてだ。

物体と肉体は違う。

生きているのと生きていないのでは色々違う。

（負荷のかりぐあいだとか破損した時の対処だとか、つか肉体なんてへたすりゃひき肉だ）。

それを頭の中で理解した瞬間、帰るのは不可能だと理解した。

しかも、この世界（テルカ「ミュレース」）とあちらの世界（地球）と次元が違う。

魔法なんてファンタジーなもの存在しなかった。

呪文を唱えて火の玉発射とか歩く人間型火炎放射機じゃねえか。

ねーよ。マジでねーよ。

理論と理屈と定理を説明しろ。

「・・・帰りたい」

ついにとうとう、本音が。

押し込めて、気にしない様に、思わないようにした、言葉が漏れた。

「・・・Mutter、母さんVater 父さん Fritz フリッツ」

臉を乱暴に拭う。

はらはらと、雫が落ちて逝く。

「・・・Ich 家m?chte 帰りたいnach Hause . . .」

「落人おちうで・・・」

「Wお前er bは、ist d誰だu!」

声のする方向を見た。

そこには狐の様な尾を持った、ナニカがいた。

六話 牢の中で見た夢（後書き）

次回も頑張ります！

## 七話 解放された（前書き）

上手く騎士団の面子が掴めていないような気がします。

## 七話 解放された

SIDE：アレクセイ

記された名前はギルヘルトGilbert・バイルシュミットBeilschmidtとギルGilbertina・ノアNoah・バイルシュミットBeilschmidtの二つ。  
同一人物の名前だ。

尽忠報国の騎士ドレイク・ドロップワートの好敵手ライバルギベル・クロイツウエーグの孫にして、アスピオの天才の家族。後ろ盾には、メイベリー家当主の三姉妹も加わる。  
手の出しがたい、傭兵だ。

彼女は女性だが、一人旅の上に身よりも少ないので男性としての身分がある。

そう、書類には記されている。権力というか、影響力でこり押しされた形だ。

まあ、別段困ることではないし、それ以外は正しいものだから何もこちらからは言うことはない。

しいて言うのなら議会をどう黙らせたのか、だ。

まあ、ばれても特には困ることはないだろうし、反対もなくすんなりと通ったのだろうと思うが。

クロイツウエーグの家名が上手く働いたのも事実だ。

クロイツウエーグは、帝都でも有数の名家だ。

先代当主の双子の弟であるギベルの言うことが通ったのだろうと推測する。

まあ、このギルベルティーナという名の女性がおそらく孫であると認識したのだ。

クロイツウエーグも直系の子供が病弱なのでいざという時の備えなのだろう。

真偽のほどは分からないが、おそらくそうであろう。

そして、この女性は6年前にたまたまポートフォリカにいたから難を逃れているが、母親はファリドハイドで死んでいる。これについては裏が取れている。ギペル・クロイツウエーグが見つげ出すまでずっと、一人だったようだ。

書類に記された、男装している女性の剣士。

それが、“僧衣の騎士” バイルシュミット。

騎士よりも騎士らしいと最近評判の傭兵なのだそうだ。

羊皮紙に書かれた経歴は隙もなく、一般にありふれたものに見える。少なくとも、矛盾や記述の間違えはない。

その子供が、幼いということを除けば。

年齢の欄には16と半年という記録が記されていて、間違いではないことを伝えてくる。

いや、自分の立場から考えれば16は幼くないのだけれど。

騎士として、男としての16ならともかく、彼女は女性なのだ。

しかも、まだ16の。

普通の一般家庭の女性なら今が一番華やいている時期である。

それを捨ててまで、傭兵として背筋を伸ばして、

生きているこの女性に何を言えるかといわれても何も言えないのだが。

(彼女なりの信念があって、こう生きているのだから自分が口をつ

つこむわけにはいかない)。

牢に入った密かに重要人物(彼女本人で無くて過保護な周りなのだけど)の、

ちらりと見た幼さが残る寝顔を思い出すと、痛ましく感じてしまうのかもしれない。

騎士団長らしくない。

騎士らしくあれ、それが自らに課せた誓いだというのに。

いや、女性に優しくするのも騎士道にはあるからあながち間違っ  
てはいないのかもしれないが、

彼女は今のところ重要参考人なのだ。

多分。いや、おそらく貴族の騎士にはめられたのだと思う。

ため息をついた。

正直、何という面倒な事をしてくれた、と部下に怒りたい。

あの三姉妹の当主は敵にはまわしたくない人材で、

中立の立場であるクロイツウエーグの扱いもデリケートな問題なの  
に。

S I D E : ギルベルティーナ

夢の中で夢を見た。

水面みなもの月、胡蝶の夢、空の星。

絶対に掴めないモノ。

幻の存在。

不可能なもの例え。

そんなのみたいな、不確かなもの。

訳が分からない。

そもそも“心”の精霊ってなんだよ。

精霊自体が信じられない。

開口一番、罵られたんだが。

不可抗力の原因不明の事故だったんだけど。

相手側でも不手際があるらしい。

次元が違うから、すごい責任問題になってるらしいけど。当事者は蚊帳の外だ。

（なんか、ローレイやらとかの固有名詞が聞こえた。ローレイって言われたら私が思い浮かべるのは祖国ドイツのライン川のローレイ伝説の人魚だ。）。

どうなるんだ、と思わずぼけっとしてたら、声をかけられた。

衝撃的な事を軽く投げかけられた。

「死ねばいい・・・」、きつとそう思った私は間違っではない。

魂がこの世界に馴染んで定着して帰れないって、直球で言われたんだけど。

私に分かりやすく言うのなら、黄泉戸喫だそうだ。

黄泉の国で食べ物を食べると黄泉の国から帰れなくなるやつ。

それで、水や飲み食いしたせいで、私は帰れないことが確定したらしい。

諸悪の根源。

むしろ遠い時空に居るローレイまじほろべ。

「酷っ!!!」

どこかで、そんな声が聞こえたような気がした。  
むろん、無視した。

ところで、目が覚めた。

壁に背を預ける形で寝ていた為に首が痛い。

凝り固まった関節を動かし、ほぐしていると。

遠くに反響して聞き取り難いが人の、声が聞こえた。

こちらへと向かってくる、軍靴の音。

何故かその音にぞわりと、鳥肌がたった。

やばいものがくる。

そうとしか思えなかった。

SIDE：シュヴァーン

「・・・出る」

言葉少なに、指示をする。

真っ白い髪にアイスブルーの瞳の男装の少女は、こくりと頷き、

そろそろと鉄格子を掴んだ、真っ白すぎる肌に鉄格子の黒のコント

ラストが美しい。

僅かにうつむいて牢から出てきた。

整った顔は青ざめた顔をしている。

確かに、銀の髪あの人の面影があるかもしれない。

そこまで、思い出した所で首を振った。

・・・思い出すな。

これは、ダミュロン・アトマイスの記憶だ。  
騎士団隊長主席、シュヴァーン・オルトレインの記憶ではない。

「あの・・・、わ、俺はどうして」

まだ、切り替えに慣れていないらしい。  
動揺している様子が手に取るようになった。

アイスブルーの瞳が動揺に揺れている。  
光の光量のせい、先ほどよりも瞳の色が濃くなっているように見えた。

「騎士団の事情で君を早く解放しなければいけなくなった・・・  
それと、君の事情はこちらで理解している。本来の話し方で構わな  
い」

そう言うと、こちらの話をもとに理解したのか。  
目を伏せ、ただ黙って頭を下げた。

「わかりました。・・・えっと、騎士様」

その言葉に、俺が目を丸くする番だった。  
丁寧な口調から察するに、本来の気象は傭兵らしからぬ性格なのだ  
ろう。

苛烈さもあるだろうが、年齢にはそぐわないほど落ち着いている。  
二重人格の様に二人の人格をころころと変えている弊害、というも  
のもあるだろう。

二重の性格は、本人が気付かないうちにじわじわと領域を狭めてく  
る。

・・・だが、死人の俺が心配することではない。  
正直、どうでもいい。」

「シュヴァーンだ。シュヴァーン・オルトレイン。・・・騎士団隊長主席を務めている。」

だから、自分でも名乗ったのが不思議だった。

今後、この女性はギルドに所属する可能性が高く。

深く知られれば、“天を射る矢”<sup>アトタルク</sup>のレイヴンであると気付く可能性も高まる。

それなのに。

「（・・・今回はレイヴンとして、すごし過ぎたのかもしれん）」

自分に舌打ちを加えてやりたくなった。

初歩の切り替えさえ上手く出来んとは、情けない。

よく理解のできない感情が胸に湧いた。

七話 解放された（後書き）

次回も頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7677r/>

---

銀の剣士は旅をする

2011年10月13日13時51分発行